



Title	統計的教育思想の生成と展開：道徳統計における「社会的なるもの」と教育 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山岸, 利次
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 乙第7104号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/79736">http://hdl.handle.net/2115/79736</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Toshitsugu_Yamagishi_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学）

氏名 山岸 利次

審査担当者	主査	教授	白水 浩信
	副査	教授	宮崎 隆志
	副査	准教授	北村 嘉恵
	副査	准教授	江頭 智宏（名古屋大学）

### 学位論文題名

## 統計的教育思想の生成と展開 —— 道徳統計における「社会的なるもの」と教育 ——

本論文は 19 世紀後半のドイツに展開した「道徳統計(Moralstatistik)」によって切り拓かれた、「社会的なるもの」が教育するという視座の生成を歴史研究として解明し、その教育思想史的意義を別決するものである。社会が教育的機能を有するという発想は比較的新しく、さしあたり 20 世紀初頭に教育を方法的社会化であると定義したデュルケーム、あるいはドイツ・ヴァイマル期の共和国少年福祉法(RJWG)における教育への権利の法定にまで遡ることができる。本論文はこうした教育史上画期となる視座が出現する歴史的条件として「道徳統計」という固有の知・実践の生成・展開を跡づけ、歴史的構築物としての「統計的教育思想」の真価を問おうとするものである。

「道徳統計」とは社会集団の道徳－習俗(morale-mœurs)状態を明らかにすべく、犯罪統計をはじめとした諸統計をクロスさせて検討する統計の一分野であり、1830 年代のフランスを嚆矢とする。これまでの教育思想史研究における「道徳統計」への言及は、デュルケーム『自殺論』が参照する統計データの出典として扱われる程度であり、極めて限定的なものに留まる。一方、統計学史研究では、「道徳統計」についての論及はあれど、その理論的定式化に寄与したルター派の神学者 A・フォン・エッティンゲン(1827－1905)に関してはその顕著なキリスト教護教論という性格から敬遠され、専ら否定的な評価がなされるのみである。本論文はエッティンゲンの主要著作を精緻に読解・分析し、統計的決定論を批判する自由意志論争という契機こそが、道徳的＝社会的現象の固有性、自律性を確認させるものとなり、「統計的教育思想」という言説体を形成する端緒となった点を具体的史料に即して解明するものである。こうした深い教養に裏打ちされた本論文の独創的な課題は、ドイツ語、フランス語、英語で著された幅広い原典史料の収集と周到な読解・分析によって応えられ、堅実な教育思想史研究としてまとめられている。

第 1 章では、「道徳統計」の前史として、統計学(Statistik)が 17 世紀中葉に遡る国家理性(Ragione di stato)に由来する術語であり、必ずしも数量化されるものではない国家に関する術知、国状論であったことが確認される。国状論はイギリスの政治算術をも併呑しながら人口現象という国力の特権的指標を見出すに至り、数量的学知としての統計学の地歩が固まっていく。18 世紀末から、コンドルセ、ラプラスによって人口統計は確率論に接合され、道徳現象への因果論的＝決定論的解明の道筋が拓かれることになる。

第 2 章では、こうした社会数学としての統計学の楽観的展望を踏まえた法曹実務家 A-M・ゲリーによる「道徳統計」の発案が取り上げられる。ゲリーは「道徳統計」の要諦に犯罪統計を据え、爾後、「道徳

統計」は専ら非違行為の計数と考察に傾注していくことになる。このような直観的、経験的なゲリーの「道徳統計」に対して理論的体系化を図ったのがA・ケトラーの社会物理学である。ケトラーは道徳現象もまた天体の運行同様、法則に従うものであり、普遍的な自然的原因と偶有的な摂動的原因が明らかになれば、すべてを決定しようと考えた。この天文学モデルによる法則決定論への固執は、「社会的なるもの」の真価を看過し、職業や道徳性、知識、政治・宗教等の影響は「平均人」からの摂動、すなわち誤差として処理されるという社会物理学の限界として露呈する。

第3章では、ケトラーの社会物理学のドイツにおける受容に端を発する自由意志論争について取り上げられ、いかにして「道徳統計」が社会統計学の直接の母胎となって、「統計的教育思想」を可能にするに至ったのかが検討される。M・W・ドロビッシュは哲学的・心理学的立場から自由意志を擁護すべく、社会物理学における「法則(Gesetz)」は道徳現象を必然的に決定するものではなく、「規則性(Gesetzmäßigkeit)」に過ぎないと批判することによって、道徳的行為を個人が選択する可能性を容認する。しかしその自由意志論は個人の心理的傾向に還元されるもので、道徳的社会問題の解決は美的教育に帰結してしまい、「社会的なるもの」の教育機能は顧慮されることがない。同じく社会物理学的な決定論に対して自由意志を擁護する立場から、エッティンゲンは「社会倫理学(Socialethik)」の構想を打ち立て、道徳現象が社会的に規定されるとする立場を鮮明に打ち出す。エッティンゲンは「社会的なるもの」が個人の道徳性(Sittlichkeit)を規定するのは、それが社会的慣習(Sitte)に媒介されることによると論じる。ここに習慣形成を社会の道徳教育機能の最たるものと定位し、その効果を「道徳統計」によって可視化する「統計的教育思想」の生成が確認される。本論文はエッティンゲンによってもたらされたこの画期的視座の転換を、その主著『道徳統計とキリスト教慣習学』(1873)等を精緻に読解・分析し、実証的かつ説得的に手堅く論述し得ている。

以上のように本論文は、1860年代のエッティンゲンの社会倫理学における慣習の有する道徳的諸力への着眼を通して、「社会的なるもの」の教育力について明確な認識に到達していた点を明らかにしたものと評価できる。またフランスに出来た「道徳統計」がドイツへと受容されるに際して、自由意志論争を契機としながら、社会統計の固有性、自律性をも確立していく思想史的機序についても明快に論じ、領域横断的な学際的視野のなかで統計的学知の受容と変位を教育思想史という観点から精彩に跡づけている。さらに「道徳統計」において、道徳性が非違行為との関係において構築されたことと関連し、国家の統治作用が治安を旨とした保護・強制教育(Fürsorge=Zwangserziehung)として顕現する点についても的確に指摘し、統治と教育を問う研究のさらなる深化をも十分に期待させる。このように本論文は、教育思想史研究に対して、顕著な学術的価値を有する新たな知見の集積であると認められる。よって学位申請者、山岸利次は、博士(教育学)の学位を授与される資格があるものと判定する。